View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Waseda University Repository

書評

久保朝孝著『古典解釈の愉悦　平安朝文学論攷』

高橋　亨

平安朝文学の古典というべき作品本文の解釈をめぐる論攷である。「本編」の十四章と「付編」の九章から成るが、これまでの研究史をふまえて新解釈に挑戦した論文をめざしたところに特徴がある。「本編」で対象となっている作品は、『伊勢物語』『うつほ物語』『源氏物語』『紫式部集』『更級日記』『讃岐典侍日記』である。「付編」には、和泉式部と紫式部についての「女流作家の肖像」、「紫式部伝記研究の現在」、「源氏物語続編作者異聞」、「平安朝文学に見る死の言葉」、「女流日記文学研究の課題」、「葉月物語絵巻解題」を載せる。

本書の質量ともに中心をなすのは、第六章から第十一章までにあたる『紫式部集』所載歌の解釈についての再検討である。例えば第六章「紫式部集の「箏の琴しばし」考――第三番歌の再検討」では、「露しげき蓬が中の虫の音をおぼろけにてや人の尋ねむ」という歌について、まず、これまで解釈上の問題点とされてきた論点を三つに絞る。

①「箏の琴しばし」の後に省略されている述語は何か。

②「参りて御手より得む」の具体的意味は何か。言い換えるなら、何を「得む」としているのか。

③詠作時期はいつごろか。

①については、竹内美千代『紫式部集評釈（改訂版）』により、「お教え下さい」ではなく「お借りしたい」が妥当な見解だとする。②は「参上してあなたの御手から直接にいただきたい」ではなく、「参上してあなたの御手から奏法の伝授を受けたい」だとする。③は「彰子中宮への宮仕え中の里居の折の作」ではなく、「少女時代の詠作」だとする。

研究史の諸説を丹念に検証しつつ、その結論は伊藤博による新日本古典文学大系（岩波）の追認となる。そのうえで、下の句の解釈についての諸説がほぼ一致しており、「露しげき蓬が中の虫の音」が自身の家屋の荒廃であり、「相手の熱意に対する褒め言葉」と解釈されてきたことを確認する。それに対して、「男からの奏法の伝授を口実とした恋の訪問の打診（詞書）と、それに対する拒絶の返答（和歌）」という新解釈を提起する。それは、『源氏物語』賢木巻で光源氏が野宮に六条御息所を訪問した場面の表現を媒介にして、「露」「蓬（浅茅）」「虫の音」が「恋」のイメージを喚起する素材だということを根拠としている。そして、「相手の熱意を称揚する表向きの意味と、その恋の訪問を拒否する裏の意味とがあいまって一首の真意を構成し、拒絶しながらも相手を傷つけないような配慮を含んだ、重奏的な構造が見てとれる」という。これは紫式部の歌の特徴であるといえよう。

ところで、久保がこうした新解釈を提起したのは、従来の解釈が、相手に対する「熱心で偉いわね」といった態度に、「どうしようもなく尊大・放漫の匂い」を感じるからだという。それにつ

いて、「論理・実証ではなく、感性の問題といっていい」と記していることにも注目しておきたい。

あたかも大学の授業の演習で、これまでの研究史をふまえた諸説を網羅的に引用して、どれが妥当な解釈かを検討し、それ以外の新たな解釈の可能性を探ったという趣の論攷である。これは、他の章にも共通する、本書の基底をなす論述の方法である。一見すると実証的に緻密な解釈を積み重ねた結果としての結論であるが、肝腎なのは「感性の問題」なのである。この章は、次のような一節で結ばれている。

「『紫式部集』は、我々の先入観や固定観念に染め上げられていて、作品本来の意義が十分明らかにされていない歌をまだまだ多く抱えている。紫式部貞女観などはその最たるものといってよい。現代の制度・慣習・通念ではなく、平安朝の実態に即した物の見方を鍛えたい。宣孝以外に男関係を認めない前提から、もうそろそろ自由になりたいのである」。

こうした視座から、第七章では、第四・五番歌の詞書の「なまおぼおぼしきこと」が「式部の初めての異性体験」であり、「手を見分かぬにやありけむ」が『伊勢物語』十八段の「知らず詠みに」をふまえた複合構造による虚構化の表現だとする。『紫式部集』の第四・五番歌は次のようである。

方違へに渡りたる人の、なまおぼおぼしきことありて帰りにけり

翌朝朝顔の花をやるとて

おぼつかなそれかあらぬか明け暗れのそらおぼれする朝顔の花（四）

返し、手を見分かぬにやありけむ

いづれぞと色分くほどに朝顔のあるかなきかになるぞわびしき（五）

紫式部の家に方違えに来た男が、「（その夜）何だかよくわからない振る舞い」に及んで帰り、紫式部はその真意を確かめるために朝顔の花に添えた歌を贈った。これが「式部の初めての異性体験」であろうこと、その相手を宣孝に限るべきでないこと、『伊勢物語』の「知らず詠みに詠みける」をふまえた表現だという久保の解釈には賛成である。

とはいえ、「手を見分かぬにやありけむ」を、紫式部とその姉のどちらの筆跡か分からずに男がとまどう、あるいは韜晦しているといった従来指摘されてきた読みの可能性を無視する結果になっているのは残念である。なぜそういうことになるのかは、諸注釈の解釈史をふまえて問題を整理し考察する久保の方法と関わっている。

竹内『評釈』は方違え所における「姉の存在の可能性」についても言及し、山本『集成』は男の歌の上の句を「ご姉妹のどちらから贈られた花かと筆跡を見分けようとしているうちに」と解釈している。これらを否定するのが木船『解釈と論考』で、「姉と式部との同室の可能性について、詞書にそれらしい記述がみられない」から「御姉妹のどちらか」の意味は託されていないとすることを、久保は「抑制の利いた穏当な見解であろう」と評価する。難波『全評釈』も紫式部の居室に「まだ姉も在世中で、おそらく

一緒にいた」のを男がかいま見したとみており、伊藤『新大系』も「式部姉妹の寝室のあたりを窺った」としている。久保が姉との関連を無視するのは、木船『解釈と論考』により姉妹同室を否定するからであろう。

しかしながら、姉妹同室していたかどうかはともかく、この男がすでに姉と関係をもっていたとすればどうだろう。久保は「なまおぼおぼしきこと」が紫式部と男との「実事」の朧化であるという解釈の先駆として、石川徹の見解をも長く引用している。そこでは、『源氏物語』の「空蟬と軒端荻」また宇治の「大君と中の君」の原形となる体験として、「姉の恋人」の男との贈答と見ている。これを今井源衛『紫式部』も支持しているのであった。注釈史は、必ずしも研究書や論文の成果を反映してはいない。

久保の「方法」は「きわめて素朴ながら作品本文の一語一句に徹底的にこだわり抜く」ことであった。それゆえ、本文に明示されていない姉や後の夫である宣孝と結合する伝記的な外部の文脈を持ち込むことに抑制的なのであろう。しかしながら、「手を見分かぬにやありけむ」が『伊勢物語』の「知らず詠みに詠みける」の言い換えで「読み手に向けたコメント」だというのは、それ自体は重要な指摘でありながらも、作品本文の外へと開かれた解釈を閉ざす結果となっている。

にもかかわらず、この節は「この虚構表現を『源氏物語』作者誕生の萌芽と見るか、『源氏物語』作者による果実か」は論証できないが、「きわめて主観的に前者の立場をとりたい」と、大きな視座で結ばれている。表現史とそれをふまえた「複合構造」の表現を読み解くことは、それをふまえて紫式部の伝記的な事実との相関を再検討する可能性を残すといえよう。

「付編」の「女流日記文学研究の課題」では、「客観的事実を踏まえながらも、それら事実の指し示す方向を把捉し、作品の論理分析へと展開できるか否か。今後の女流日記文学研究活性化の鍵はここにある」という。その「作品の論理」の具体例としてあげられているのが『更級日記』であり、「冒頭の薬師と末尾の阿弥陀の照応は、そのまま往生思想における両仏の照応関係に重なるものであった」と大胆にいう。これについての詳細な論は、「本編」の「更級日記の夢―前生夢の機構」と「更級日記の薬師仏―構想を支える西方遣送の機能」にある。その発想の起点となったのは浄瑠璃寺の伽藍配置であり、かつて私も共に何度か浄瑠璃寺に誘われて訪れたことを思い出すが、部分の解釈から「作品の論理」への飛躍がある。

作品本文の細部についての徹底的な読みを契機にして、どこまで「作品の論理」の全体像を解読していくことができるのか。王朝女性たちによる日記文学を単純な事実の反映と読むことができないことはもはや明らかだが、日記や家集においては事実との関連を慎重に考察していくこともまた、当然ながら必要である。表現史とそれをふまえた引用関連の「複合構造」を読み解くことによって、王朝女流日記研究と作り物語研究との接点を再考していくことへの展開を期待したい。

（二〇一一年一月　世界思想社　A5判　三八〇頁　税込六三〇〇円）